

## 薄れていく親子関係

福山YMCA国際ビジネス専門学校 ホアン・アン（ベトナム）

「バキッ」という大きな音が私の足から突然聞こえた。「え、何？ 何の音？」そう思った瞬間、激しい痛みに襲われた。「痛いよ。だれか助けて。もう痛すぎて動けないよ。」と涙ながらに叫んだ。

私は、子供のころから一度でもいいから、アイススケートをしたいと思っていた。その願いが叶い、うれしくてスケートリンクに降り立った瞬間の出来事だった。子供のころの夢が叶った時、私の身に災難が降ってきた。スケートリンクで転んでしまったのだ。すぐに病院に運ばれ、診察してもらった。ただの捻挫だと思っていたので、先生に「私の足は、大丈夫ですか。すぐに治りますよね。」と聞いた。先生から「はい」と言われると思っていたが、先生の答えは私の予想をはるかに超えていた。「あなたの足は折れています。入院して手術しなければなりません。」その言葉を聞いた時、一瞬目の前が真っ暗になり、これからどうなるのだろうととても不安になった。親元から離れて、初めて留学した日本の地でこんなことが起こるなんて…。想像だにしていなかった。足の痛さも相当だったが、それより心に感じた孤独感の方が大きかった。

そんな時、病院で一人のおばあさんに出会った。「おはようございます。今からリハビリですか。今日もがんばりましょうね。」と声をかけると、おばあさんは、「おはよう。あんた若いからすぐに治るよ。こんなに膝も曲がるんだから。私はとても膝が痛いから、そんなに曲げられないがね。」

これが私たちのいつもの会話だ。おばあさんは、90歳代の高齢者だ。いつも元気に笑顔で私に話

しかけてくれる。おばあさんは膝にけがをしていて、リハビリが苦痛でたまらない様子だった。でも痛くてもおばあさんは我慢して足のリハビリを受けていた。その姿を見て、私は心が熱くなるものを感じた。いつもおばあさんに若いと言われていた私は、おばあさんの前では、決して痛いとは言えなかった。だけど、そんなおばあさんは、一人ぼっちだった。入院中、私にはいろいろな人がお見舞いに来てくれたが、おばあさんのところには、おばあさんの子供が一回、お見舞いに来ただけだった。「なぜ、おばあさんのところには、ほとんどお見舞いに来ないのだろう」と私はずっと不思議に思っていた。それだけではなく、一人で入院している寂しそうな老人をたくさん病院で見た。私の国では、日本の医療ほど発展していないので、患者の介護は必ず本人の家族がしなければならぬ。だから、患者の身の回りの世話はずべて家族がすることになっている。だれかが入院すれば、本当に大変だし、面倒だ。しかし、自分の家族だから当たり前だと考えているので、みんな一生懸命世話をしている。

日本で出会ったおばあさんを見ながら、自分の祖母を思い出した。祖母が病気になった時、私はとても不安だった。もし祖母が明日この世からいなくなったらと考えると、心が張り裂けるほど悲しくなり、すぐ帰国することを決め、祖母に会いに行った。その時のことを考えながら、日本の親子関係、家族関係には、ベトナムと比べて何か足りないものがあるように感じた。

日本の親子関係は、ベトナムに比べて薄くなっているように感じている。子供が成長すれば親から離れることは当たり前のことだ。特に社会のリズムが速い日本では、みんな自分の生活のために真面目に働いているから、家族のための時間は少ないのかもしれない。結婚すれば自分の家族を支えなければならぬから両親の面倒が見られないのかもしれない。独身の人も一人で親の面倒を見るのは大変なので、老人ホームのような設備の整ったところに任せて、子供はお金だけ払って親

孝行していると思うのかもしれない。だから、結局おばあさんのような孤独なお年寄りが増えていくのだろう。これは、本当の意味の親孝行と言えるのだろうか。

日本で入院して、おばあさんに出会って、本当にいろいろなことに気付いた。自分は一人になっても、孤独でも、心を強く持つてそのことを超えることが大切だ。そして、どんな時でも両親を大切にすべきだ。日本のように家族関係が薄くなってしまうことは、本当に注意すべきことだ。十分な生活を求めすぎて、家族の大切さを忘れてしまっただけではない。このような状態が続くとこれからの日本は家族だけでなく、社会や国のことについて無関心な人を育ててしまうのではないだろうか。

